



# 浄土真宗本弘寺婦人会だより

平成11年9月

第7号

## 「お彼岸に思う」

あなたは何を頼りに生きていますか？と問われた時、なんと答えるでしょうか？  
財産が頼りと答える人もいます。

権力が頼りと思う人もいます。

我が子を頼りにしている人もいます。

しかし私たちが、頼りにしているものは必ず失います。いつか必ず崩れます。

それでは、失うこともなく、崩れることもなく、本当に頼れるもの、力になるもの、  
そうしたものが果たして有るのか無いのか。有るとすればそれは何であろうか？

この事を、お釈迦様も、親鸞聖人も、たくさんの高僧方も命をかけて求められました。

私たちがそうした大事なことを求めさせていただく必要がありますが、  
家を捨てて、社会を離れ、山に入り修行をすることのできない私たちは、  
仏法聴聞の中に求めさせていただくしかないのです。この事が彼岸会の行事であります。

ところが、私たちはそうした大事なことを仏法の中に求めようとせず、

自分が学んだ学問や、種々な経験を通して得た知識、

そうした眼でものを見、考え、求めようとするようです。

ですから、「俺の目は確かだ。くるいは無い。」なんて言うのです。

その確かだと思っている眼の特徴を考えてみますと、

① どれだけ視力を誇っても、光なくしてはものを見ることができない。

② 自分の目で自分の顔が見えない。

③ 何事も自分の分別でものを見る。

三番目の何事も自分の分別でしかものを見ることができない。

この事を深く考えなくてはならないと思うのです。

自分の分別でものを見ますから、

善か悪かをとらわれる。

正か否かをとらわれる。

きれいーきたないととらわれていた私が、そこに仏法聴聞させていただくと、

確かに道徳や法律の尺度では善人であった私も、仏法を尺度に自分を見つめたとき、

不平不満に満ち、何かとすぐに腹を立て、大した事でもないのに愚痴ばかりこぼしていた、

恥ずかしい、情けない、愚かな私でしたと自覚される。

そうした私でしたと自覚がされてきますと、自然と私の口からお念仏が、

“ナンマンダブツ、ナンマンダブツ”とこぼれるものです。

そのお念仏の中に何が尊いか、何が頼りになるかもはっきりしてきますし、

浄穢不二、絶対平等の世界が開かれて来るのでしょうか。

住職

## ～ 会員の広場 ～

### 「二十周年を迎え」

丹羽 富枝

本弘寺婦人会は、昭和五十六年六月二十日発足以来、  
ここに二十周年を迎えようとして居ります。

年月の経つのは早いもので、この節目に当たり振り返ってみると、  
思い出されること数多く、法話の中で印象深き御言葉は、

『人生の苦しみは如来の激励である。』でございます。

どうして苦しみを喜びとして受け止めなくてはならないのか？と、  
悩み、不満に思われてならなかった私が、今ようやく理解でき、

感謝の気持ちでいっぱいでございます。

そして、婦人会会長が、東本願寺派婦人会常任理事とお成りになられ、  
大変喜ばしいことと存じ、私たちも東京本願寺の婦人会会員とならせて頂いたことは、  
誠に光栄に誇りに思います。

本弘寺婦人会の今後のさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。

合掌

### 「美しいみ仏との出会い」

本間 マリ子

私たちの衣服を古く辿っていくと、今でも時々見かける貫頭衣にぶつかる。

さらに奥へ行くと、飛天の身体にまつわる、あの薄い羽のような布に行き当たる。

そういう布を身にまとっているのであろう如来の、あのドレープいっぱいの着衣は、

実は納衣といって、なんとトイレ掃除の作業衣という意味を持つものだそうで、

知ったときは驚いた。そしてその深い志に感銘した。

ある時、山里のお寺へ行ったとき、たくさんの仏像の中に如来座像が、

ゆったりと人々を迎えていた。

もう色彩も消えて木肌のままの姿だったが、肩から胸へと拝見させていただくと、

着衣のドレープの中に一筋、二筋、美しい文様が描かれているのが見えた。

「あっ、文様がある。この仏様はきれいなものを着させてもらっていたのだ。」

と、ホッと安心した。

なんとお洒落で、ファッショナブルな仏様だったのでしょか。

心に残る仏様のおひとりです。

「聴聞をいただき三十有余年

悩みのりこえ今日の彼岸会」

高井 キク

「経本を背なに背おいし礼拝の

同行の道またふえるなり」

「松を背に親鸞聖人行脚像

迷える皆に救いの手を」

矢部 克子